



「ゾロアスター教と大乗仏教」

Zoroastrianism and Mahayana Buddhism

《フォーラム開催の趣旨》

- ◎「ユーラシア研究センター」は、2015（平成27）年10月に奈良県立大学に設置され、奈良とユーラシアに関わる多様な分野の調査研究を行っています。
- ◎本フォーラムは、その調査研究活動の一環として、2年前に引き続き「ゾロアスター教」をテーマに開催しました。
- ◎従来のゾロアスター教と奈良（日本）との関わりについては、主にサーサーン朝などペルシア中心地からの文化伝播として捉えられてきました。
- ◎今回のフォーラムでは、新たに「中央アジア・ソグド系文化」という視座も採り入れ、ゾロアスター教神官による祭式の再現や、世界第一線で活躍する諸分野の専門家による最新研究成果報告などで議論を深めました。
- ◎古代の奈良（日本）に、ペルシア系とソグド系の二つの中心を持つイラン文化が並行・重層的に渡来していたとすれば、奈良の文化資源にも「新たな魅力」が発見できるものと期待されます。
- ◎今回のフォーラムを含め、本センター活動の成果を広く内外に発信し、県民生活の向上や奈良の知名度・国際的プレゼンスの向上に結びつけていきたいと考えています。

奈良県立大学ユーラシア研究センター
副センター長・特任准教授 中島敬介



日時：2019年12月7日（土）

会場：奈良県立大学 3号館

主催：奈良県立大学

中央アジアで生まれたゾロアスター教は、南下と西進の果てに、ペルシアの国教となった。
 大きな乗り物（大乘）となった仏教は、北上・東進し、奈良（日本）の礎を築いた。
 両教は、違っているのに、どこか似ている。奈良に根づいた信仰・文化とゾロアスター教…。
 そろそろ決着つけようか。

奈良県立大学
 ユーラシア研究フォーラム 2019

ゾロアスター教 と 大乘仏教

*Zoroastrianism
 and
 Mahayana Buddhism*

中央アジアで生まれたゾロアスター教は、南下と西進の果てに、ペルシアの国教となった。大きな乗り物（大乘）となった仏教は、北上・東進し、奈良（日本）の礎を築いた。両教は、違っているのに、どこか似ている。奈良に根づいた信仰・文化とゾロアスター教…。そろそろ決着つけようか。

東大寺長老
 Kousei Morimoto
 森内 誠

ムンバイ神学校教授
 (ゾロアスター教神官)
 Parvez Minocher Bajan

ルール大学ポーム教授
 キヤース・シュレザニヤ
 Kianoosh Rezania

皇南大学教授
 チャン・シャオグイ
 Xiaogui Zhang
 張 小貴

タジキスタン国立古代博物館職員
 キャミラ・マジュルノヴァ
 Kamila Majunova

神岡文化芸術大学
 文化・芸術研究センター教授
 Takeshi Aoki
 青木 健

奈良県立大学
 ユーラシア研究センター
 特任准教授
 Keisuke Nakajima
 中島 敬介

令和元年 参加無料 | 150名

12/7 [土]

13:00 ~ 17:00 (開場12:30)

公立大学法人
奈良県立大学
 3号館2階多目的ホール

主催：公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター <http://www.narapu.ac.jp/>

- 1.ゾロアスター教とは何か (解題、パフォーマンス)
- 2.講演
- 3.ディスカッション

主催者挨拶
 伊藤 忠通
 (公立大学法人 奈良県立大学学長)

ゾロアスター教の祭式 (パフォーマンス)
 パルヴェーズ・バジャーン (アソーナン・マンダール神学校教授)

はじめに
 『菅谷文則の直観と推理-唐招提寺薬師如来立像左掌の埋銭-』
 中島 敬介 (奈良県立大学ユーラシア研究センター特任准教授)
 石田 大一 <VTR> (唐招提寺 副執事長)

学術講演
 『9世紀のゾロアスター教-関係文献の作成とイスラームとの相互影響-』
 キヤース・シュレザニヤ (ルール大学ポーム教授)

『サグディード考-ゾロアスター教の臨終祭式とそのシルクロードにおける波及-』
 張 小貴 (皇南大学教授)

『タジキスタンのゾロアスター教拜火寺院』
 キャミラ・マジュルノヴァ (タジキスタン国立古代博物館職員)

『ゾロアスター教祭式の象徴-成人儀礼・ナオジョデについて-』
 パルヴェーズ・バジャーン (アソーナン・マンダール神学校教授)

『中央アジアにおけるゾロアスター教と大乘仏教』
 青木 健 (静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター教授)

特別講演
 『私の出会ったゾロアスター教』
 森本 公誠 (東大寺長老)

登壇者によるディスカッション

※各タイトルと内容異なる場合がございます。

【図版】 右ページ上 : チンワトの橋 (木彫)
 〃 下 : 護摩焚き
 左ページ中右 : フォーラムチラシ
 〃 中左 : フォーラムプログラム
 〃 下 : 祭式パフォーマンス



菅谷文則の直感と推理

—唐招提寺薬師如来立像左掌の埋銭—

奈良県立大学ユーラシア
研究センター 特任准教授

中島 敬介

Keisuke NAKAJIMA



◎B.C. 17〜10世紀ごろ、ザラスシュトラ・スピターマ（ゾロアスター）が創唱したゾロアスター教は、倫理的善悪—三元論は不変の教義としながらも、複数の興隆期・暗黒期を経て神格構造が遷移するなど、時代による大きな変容が認められる。

◎ゾロアスター教と奈良（日本）との関わりにおいては、どの時代・地域の教義や祭式を対象に考えるか重要なポイントとなる。

◎故・菅谷文則さん（前奈良県立橿原考古学研究所長）は、視点を従来のペルシア国教型から、イラン高原北東部から中国に入った中央アジアのゾロアスター教に移し、シルクロードの都市国家・ソグディアナの民（ソグド人／胡人の動向に注目した。

◎とくに唐招提寺で鑑真和上を継いだ「安如宝」が胡人であり、その如宝が造立した金堂薬師如来立像左掌の埋銭と、『唐会要』（961年成立）に記述されたソグド人の風俗慣習との類似性を、はやくから指摘していた。

◎この菅谷前所長の魅力的な「仮説」は、どのように捉え得るか。唐招提寺石田太一副執事長におうかがした。

◎如宝さんは、鑑真和上・法載・義浄（いずれも漢人に次ぐ唐招提寺第四世で、安という姓から胡人と見られている。金堂の薬師如来立像は如宝さんの造立によるもので、銅銭3枚が埋納されている。いずれも国内銭で平安期のもも含まれている。

◎ただ、如宝さん以前の造立である本尊・盧舎那仏の両方の掌にも大小2つの「玉」が埋め込まれ、また新宝蔵に安置された仏像の胸部にも「瑠璃玉」らしき埋納

品のあることがわかっている。唐招提寺の造像は、唐代の芸術様式を反映した当時最先端をゆくもので、従来の天平芸術様式とは違っていた可能性が高い。

◎鑑真和上座像も、この時代には画期的な「ありのまま」の鑑真さんを写した肖像だった。興味深いのは、その座像の内部が「真つ白」なこと。火葬された鑑真さんの遺骨を粉末にして塗り込められている。唐招提寺では「大切なものを内に込める」という伝統があるようだ。

◎金堂薬師如来立像の埋銭3枚は、如宝さんにとって—大切でかけがえのない—鑑真和上・法載・義浄の恩師・先輩を象徴しているのかも。各銅銭の年代も3人の時代にほぼ合っている。

石田太一「唐招提寺副執事長」
◎菅谷前所長の推理は「安如宝は、晩年に造立した薬師如来像の掌中に追憶のソグドの通過儀礼である『掌中銭』を再現したのではないかというものだった。この一文の前に、石田副執事長の「唐招提寺の『大切なものを内に込める』という伝統を継承した安如宝」というご教示を重ねて、結論に代えたい。



9世紀におけるゾロアスター教

—関係文献の作成とイスラームとの相互影響—



ドイツ・ルール大学ボーフム 教授

キヤーヌーシュ・レザーニヤー

Kianoosh REZANIA

・言語学上、イラン語は歴史的に古代・中世・近世に分けられ、中世イラン語(B.C.300〜A.D.900)のコーパスで最も多く約80万語を占めるのが、イラン西部の中世ペルシア語(パフラヴィー語)文献である。

・そのうちの約90%をゾロアスター教関連のテキストが占める。注目されるのは「パフラヴィー語がサーサーン朝の公用語であったにも関わらず、ほとんどが、聖典『アヴェスター』の翻訳・解説・派生書等に費やされ、サーサーン朝の教養や国民史(叙事詩)がほぼ記録されていない(3%未満)ことだ。

・これは、9世紀ごろから盛んになったゾロアスター教神官たちによる著作活動の精力が、イスラームの圧力に対抗して「口承教義の書物化による教団の維持に向けられたからだ」が、そのためにサーサーン朝の伝統的な知的遺産を活用する発想はなかったことを示している。

・一方、これとは対照的に、同時期の初期イスラームは積極的にサーサーン朝の「伝統」を吸収した。サーサーン朝が継承した王朝の歴史・叙事詩・ペルシアの系図、さらにはゾロアスター教の知識の一部をも取り込むなど、サーサーン朝の国家の歴史を包括的に統合し、これによってイスラームの教義や慣習を豊かにする方法を採ったのである。

◎初期イスラーム期におけるゾロアスター教の変容

・ゾロアスター教の世界観・倫理観が、善神(霊・オフルマズド(アフラ・マズター)と悪霊(神・アフレマン(アンラ・マンユ)の存在が前提とする「二元論」であることはよく知

られている。しかし、このような二元論はサーサーン朝期のゾロアスター教には見られない。

・サーサーン朝期のゾロアスター教では、宇宙(世界)創世の起点に存在するのは「善・悪の2神ではなく、唯一絶対の「永遠Eternity」である。善・悪の神は、この「永遠」が「時間」一年・月・日といった一定の時の区分けに変化した瞬間、「永遠Eternity」の双子の子神として「出生」される。

・ゾロアスター教が二元論の宗教に変容するのは、サーサーン朝の滅亡(7世紀)以後、9世紀に入って「ペルシア・イスラーム」世界が姿を現す、初期イスラーム期である。この時代の環境の変化―イスラームとの対立を伴う接触―が、ゾロアスター教を今日知られる「二元論の宗教に変えたのである」。

・イスラームの最高原理は「アッラー＝唯一絶対神」であり、これ以外の神の存在を許す宗教を全否定する。イスラームと対立したゾロアスター教側は「二神教＝排他的概念」と捉え、自らの信仰を「イスラームのような一神教」と区別するため、世界観・倫理観から「二元論」的要素を取り除いた。その結果、イスラームの一神教とは対照的な「三元論」が新たなゾロアスター教神学原理となり、唯一神から生じた従来「2霊神」を善神・悪神に区分する「三元論」のゾロアスター教となったのである。

サグ・ディード考

—ゾロアスター教の臨終祭式とそのシルクロードにおける波及—

暨南大学 教授

張小貴

Xiaogui ZHANG



◎ゾロアスター教においては、教徒が亡くなると死体がダフマ（葬送施設）に搬入されるまでの間、「サグ・ディード」と呼ばれる「犬」を用いた死体浄化の儀式が行われる。パフラヴィー語（中世ペルシア語）でsaagは「犬」、dīdは「視る」を意味し、「4つの眼」を持つsaag、すなわち眼の上に斑点模様のある犬が用いられる。

◎中世ペルシアのゾロアスター教では、善悪二元論に基づき、善なる動物である犬が視つめることで、死体に取り憑いた悪魔を追い払うと考えられたのだ。

◎近代においてペルシアに残存したゾロアスター教徒に関する研究では、サグ・ディードにおける犬の役割は、死体に尿をかけて浄化する役割に変化している。

◎同様のサグ・ディードは、ダフマのタイプが「沈黙の塔」に変化した、パルシーイランドに移住したゾロアスター教徒の臨終儀式においても継承されている。

◎中央アジア・ソグド人のサグ・ディードの詳細はわかっていないが、各種資料から類推することができる。発掘された6〜7世紀の納骨壺には犬のレリーフが彫られ、また犬と神を祀る月例祭の記述も残されている。9世紀のものには石棺を運ぶ馬の前に犬が描かれており、臨終儀式の順序と儀礼と考えられている。また、中国に残された史料には、7世紀のサマルカンド（ソグディアナの代表的都市国家）のゾロアスター教徒が共同で犬を飼い、遺体を食べさせる浄化儀式を執り行っていたとの記述がみられる。

◎中国で「祜教（けんきょう）」と呼ばれたゾロアスター教は、

中央アジアのソグド人からもたらされたが、あるいはこのようなサグ・ディードの儀式も伝わっていたのかもしれない。◎ゾロアスター教のサグ・ディードについては、記録や史料が乏しく、簡単に決意論つけることはできないが、時代の変遷や波及した地域の環境等に依りて、「行為」はさまざまに変化したものの、善なる動物である犬を用いて死体を浄化させるという「本質」は不変のまま維持されたことは間違いないと思われる。



タジキスタンのゾロアスター教拝火寺院



タジキスタン国立古代博物館 職員

キャミラ・マジュルーノヴァ

Kamila MAJLUNOVA

◎もともとアーリア人はゾロアスターが出現する以前から、伝統的に火を至上の存在として崇拜し、太陽と月を火が具現化されたものと見ていた。そのような火の崇拜者であったアーリア人にとって、宗教上の最重要原則は「多神教信仰ではあったものの『アフラ・マスダー』が存在し、かつそれを最高神として認識することだった。

◎それをうかがわせる遺跡が、タジキスタン、西バタフシャー州、パミル地方のカロン（4000年前の都市遺跡）から発掘されている。出土した5つのドームは古代の拝火施設と考えられている。パミル地方では、ずっと時代が下った5〜6世紀のカフィルカラ遺跡からも、火の寺院跡が発掘されている。

◎同じくパミル地方の民家には、入り口右側に円形の暖炉がある。結婚式や旅行の前などには、暖炉に拝礼する風習が今も残っている。また、民家の伝統的な天井建築様式は地元で「チュート(Chud)」と呼ばれるが、この採光施設は太陽・月など「ゾロアスター教も含め」古代アーリア人の思想(信仰)を具体的に示すものと考えられている。

◎タジキスタン南部のタフティ・サンギン遺跡(B.C.5世紀〜A.D.5世紀)では有名なオクス寺院が発掘されており、拝火杯も出土している。オクス寺院はギリシアの影響も受けているが、祭壇背後にアテシユガー(灰を貯める穴)を持つことから、火の寺院と考えられている。なお、すべての祭壇や灰の貯蔵場所は、破損の可能性を想定して、耐久性に優れた日干し煉瓦で上部が覆われている。

◎北部のソグド州(クム、アクテッパ、ガルタニ・ヒソール、



ハウルジュシヤ)からは、建物がほぼ当時の状態のままで発掘され、複数の聖所、拝火壇等が見つかっている。

◎タジキスタンの歴史学・考古学上の成果によれば、いずれの火の寺院も中央がドーム状で、祭壇は広く四角い部屋の中に造られている。

◎一方、それらを見比べると、地域によってさまざまに異なっており、パミル地方の火の寺院は、高山地帯や小高い丘の上に建てられ、上部が覆われていない。これに対し、南部と北部の寺院は、要塞状に囲われたエリアの内部に密封的に造られている。このような造りおの違により、機能もその一部が異なっていたものと思われるが、本質的な火への信仰の意味は共通していたことは間違いない。

ゾロアスター教祭式の象徴

—成人儀礼・ナオジョテについて—

アソーナン・マンダラ神学校 (ムンバイ)
教授 (校長・理事) / 博士 (哲学)

パルヴェーズ・バジヤーン

Parvez Minocher BAJAN



- ◎「ナオジョテ(Navjote)」とはパールシー(インドのゾロアスター教徒)の子弟に施される入信式で、「新しく、祈りを捧げる者」を意味する。ゾロアスター教徒にとって最も重要な儀式。これを経た者は、その日からゾロアスター教コミュニティの一員となり、その慣習や規律に従わなければならない。
- ◎もともと、ナオジョテは、15歳前後の子供を対象に行われていたが、その後、徐々に低年齢化し、今では7歳の子供に対しても行われるようになった。現在、ナオジョテの儀式を受けるのは、7歳から11歳までの子供である。低年齢化は、インドの生活風習の影響に因るものかもしれない。あるいは、イランでは5歳くらいから宗教面での教育を始め、7歳で入信できる準備をしているから、こちらの影響があるのかもしれない。
- ◎この儀式では、まず聖なるシャツ「スドラ(Sudreh)」と聖なる紐「クステイ(Kusti)」を着せる。
- ◎「精神世界」と「物質(肉体)世界」の二元性を説くゾロアスター教では、祈りや儀式は人間が精神世界とコンタクトするために欠かせない。教徒は常に清浄な衣服であるスドラとクステイを身につけていなければならない。脱ぐのは沐浴の時だけで、その時も3歩以上離して置くことはしない。
- ◎スドラとクステイは「悪」が体内に侵入するのを防ぐ大事なバリア。とくにクステイは下から入ってきた「悪」を上半身に行かせないようにする「シャッター」の役割をしている。
- ◎スドラは9つの部分から成るが、ゾロアスター教に対する忠誠と信仰を意味する「ギレバーン(Girheban)」と

いう、蓋に紐のついたポケットが最重要。別名「善行を入れておく袋」とも呼ばれ、純潔と善行を象徴する。亡くなる時はスドラだけを身にまとい、ポケットに善行だけを入れて旅立つ。

◎スドラは「幸運な道筋」と「扱いやすい服」の二つの意味を持ち、素肌に着る。その上から「クステイ」を腰の周りに3回巻く。子羊の毛糸2本で作られ、無垢と純潔を表すとともに、左右前後に結びを付けて正しい方向が示されている。ゾロアスター教は、自分の幸福よりも、世のため人のために尽くすことを教える。クステイを巻くのは、教徒がその教えを確認し、自らその用意ができたことを意味する。

◎ナオジョテでは、「ナン(Nahan)」(ザクロの葉を食べ、niran(牛の尿)を口に運ぶなど)等のさまざまな儀式が続くが、最も重要なのは子供が信仰箇条を唱える部分。これによって善思、善語、善行の実践を心に刻む。

◎ゾロアスター教徒は、魂の救済のために、己の内面を見つめなければならないと信じる。ゾロアスター教の道德的構造の要は、思考、言葉、行いの三位一体なのである。



中央アジアにおけるゾロアスター教と大乘仏教



静岡文化芸術大学
文化・芸術研究センター 教授

青木 健

Takeshi AOKI

◎これまでイスラム以前の中央アジアの宗教を論じる場合、「中国語資料」のプリズムを通して、「大乘仏教」の観点から扱ったことが多かった。今後は、イラン側の資料を通して観察することも重要ではないか。

〈貨幣の銘文〉 コインの銘文は、国家イデオロギーを表明する場でもある。サーサーン朝銀貨の銘文は、5世紀前半までは「皇帝現人神思想」を表明しており、「コイン裏面の烽火壇以外にゾロアスター教的要素を見出せない。しかし、5世紀半ばに皇帝が頻繁に中央アジアに遠征するようになると、「ゾロアスター教伝説」に因んだ銘文が登場する。発表者は、この変化は、ペルシア帝国宮廷が直接的に中央アジアのゾロアスター教文化に触れたことで齎されたと考えている。

〈ペルシア皇帝の勅令〉 5世紀前半にサーサーン朝ペルシア帝国からアルメニア王国へ示達された勅令に拠れば、彼らはズルヴァーンと云う時間の神を崇拜する拝時教徒であった。しかし、6世紀後半に完成された中世ペルシア語文献には、二元論的なゾロアスター教が表明されている。つまり、5世紀前半から6世紀後半に至る100年間に、ペルシア帝国の宗教を揺るがすような何かが起こったのである。発表者は、5世紀半ばに中央アジアから二元論的なゾロアスター教が伝えられ、ペルシア帝国独自の拝時教を駆逐したと考えている。

〈5世紀の中央アジアの宗教状況〉 イランの宗教史を考える上の1つの焦点は、5世紀の中央アジアの宗教状況である。4世紀のクシヤン・サーサーン朝のコインの銘文にも、「ゾロアスター伝説」に因んだ銘文が登場する。この当時、バクトリアでは、大乘仏教と烽火壇礼との習俗の痕跡が認められる。

また、ソグディアナでは、大乘仏教とゾロアスター教が共存していた。発表者は、大乘仏教と共存した段階の中央アジア・ゾロアスター教が、6世紀にイランで成立した二元論的ゾロアスター教の形成に大きな影響を及ぼしたと考えている。

〈奈良県事業参加を通して〉 2014～2017年度に奈良県が実施したシルクロード東西文化交流研究事業調査から、以下のような示唆を得た。

・調査：タジキスタン・ペンジケントでは、7～8世紀に烽火神殿と仏教寺院（いずれも伝承とが並立していた。エサンポイでは、ゾロアスター教と仏教と儀礼面では融合していた事実を裏付ける出土品があった。 (2014年)

・調査：かつてのソグディアナと呼ばれる地域の烽火壇はポータル化していた。 (2015年)

・調査：逆に、ウスベキスタン・ホラズムには純粹な形のタフマ（葬送施設）があり、砂漠都市には中央に烽火神殿があった。 (2016年)

・キルギスでは仏教寺院とキリスト教云々が市街中央部、ゾロアスター教寺院が城壁外にあった。 (2016年)

・西域都護府には中心市街に仏教寺院があり、アウトアにゾロアスター教徒の墓が多く存在した。 (2017年)

以上の調査をから、中央アジアにおいてはイランにおけるようなヒュアナ形のゾロアスター教は存在せず、大乘仏教的なものとの混じり合っている。このことが今後の研究のつ前提になるのではないかと思う。

私の出会ったゾロアスター教

特別
講演

東大寺 長老

森本 公誠

Kousei MORIMOTO



◎ゾロアスター研究を専門としないなかでも、学びの合間にゾロアスター教事情に出会うことがある。そのさまざまな側面を見ることで、大乗仏教とはどのような係わり合いがあるのか、3つのテーマを挙げ、問題提起の一助とした。

※要子エック箇所

1. アラブの地理書に見るゾロアスター教徒

◎イスタフリー（951頃没）『諸道諸国誌』より抜粋・要約

（1）ファールスでは啓典の民の宗教のうちでも、ゾロアスター教徒がもっとも多い。

（2）ファールスの拜火寺院については、「……各地域に多数の拜火寺院が存在し私の計算や記憶に収まらないほどである。なかでも信者たちももっとも崇敬している著名な寺院はカーリヤーン拜火寺院である。

（3）ゾロアスター教の宗教的慣習では「教えに反した女性教徒はしがるべき拜火寺院の奉仕者によって「……」牛の尿によって浄められるのである。

（4）ファールスの人々には3つの言語がある。その一つは「……」ペルシャ語で、「……」大抵の人にとって理解できないことはない。次は「……」パフラビー語といい、ペルシヤ人でもこれを理解するには注釈が必要である。次はアラビア語で、「……」大抵の一般人でも使っている。

◎イブンハウカル（979頃没）『大地の姿より抜粋・要約』

・上記（2）（4）とほとんど同一の記述がある。

（5）ファールスにはユダヤ教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒が住んでいる。サービア教徒やサマリヤ教徒はいない。諸宗教のなかでもっとも多いのはゾロアスター教徒である。

（6）ファールスでは黒色インク（墨）が生産されている。「……」中国製を除けば、どんな国のインクよりもすぐれている。

それは古代のゾロアスター教徒のもっとも偉大な拜火燃焼つまり煤そのものから作られているからである。

◎ムカッダシー（999頃没）『諸地域の知識に関する最良の区分』より抜粋・要約

（7）カーリヤーン(كاريان)は小さな町だが村の人口は多い。ここには拜火寺院があって、人々はもっとも崇敬しており、その寺院の火を他の地方に運んでいる。

（8）遺体は衣服を脱がせ、男たちが柩を担いで先頭を歩き、女たちが後ろに続く。「……」（別の写本：ホーズイスターンと同様に）笛や太鼓を葬儀場や墓地で鳴らす。ペルシヤ人が住む州では、墓地に出かけるさいにコーフンの章句を読むことは知られていない。

※要子エック箇所

2. 東アジアにおけるゾロアスター教の痕跡

◎西安出土パフラヴィー・漢文併記墓誌

（漢文）神策軍散兵馬使蘇諒の妻馬氏が咸通15年2月28日（874年3月19日）午後4時に26歳で没した。

（パフラヴィー文）これはスレーン家の出たる左神策軍の、永霊者たる（今は亡きまたは故）（一）騎長の娘にして、王族の永霊者マーシーシュが、永霊者ヤズドカルト（三世）の240年、唐朝の260年、威光赫赫たる常勝の大王の咸通15年、そしてスバングルマト月スバングルマト日（すなわち）建卯の月（に）、彼女は年26で遁世者となった。そして彼女の坐所は（今や）最勝界たるカロードマーンにおいてオーフルマストとアマスフスバンド諸神とともにあることとなった。（彼女に）平安（あれ）。（一部略）

・長安には義寧坊に景教（ネストリウス派キリスト教）大秦寺があり、崇化坊にはゾロアスター教寺院の祿寺があった。

・画言語の銘文を対比して興味深いのは、漢文で妻とのみあつた馬氏

マーシーシユがパフラヴィー文では蘇諒の娘であると明記されていたこと。玄奘など西域を旅した求法僧が波斯国（ペルシア）の習俗に触れ、ゾロアスター教徒の近親婚を嫌悪すべきこととして報告しているが、ここに最近新婚の実例を見出す。ゾロアスター教では近親婚は功德があると宗教的に勧められてきた。

◎正倉院宝物「羊毛腸緋屏風」とソグドの都アフラシアールの宮殿壁画

・伊藤義教著『ゾロアスター研究』（岩波書店、1979）、同『ペルシア文化渡来考』（岩波書店、1980）。とくに後者は正倉院宝物の謎解きや二月堂修二会についてのゾロアスター教的解釈を施す。正倉院宝物「羊毛腸緋屏風」の大きな巻き角をもつ羊のデザインは現ザマルカンド郊外のソグドの都アフラシアールの宮殿で発見された壁画の羊と瓜二つ。ゾロアスター教は同じイラン系のソグド人にも共有されていた。

◎東大寺二月堂修二会における結果

・修二会について、とくに結界という概念に絞って補足したい。結果とは、仏教では元來僧侶たちが戒律などを維持するために一定区画を限ることであったが、仏教が密教化したり神仏習合が進んだりしてくると、修行道場などに魔障が入らないように特別の修行法を行うようになった。方法はさまざまだが、一定区画の聖域化を図るもので、浄めの方法にこだわるゾロアスター教の宗教観にも通じる。そのような結果が二月堂の修二会でも、次のようなかたちで行われている。

・〈注連縄〉二月堂一帯を聖なる空間として設定する目的

で、2月21日から3月14日まで注連縄を張る。

・〈格子戸〉二月堂の礼堂部分は結界を意味する荒い格子戸によって区切られ、男性のみ入ることが許される。

・〈溝〉本尊十一面観世音菩薩が安置されている内陣は、もともと聖なる空間であり、礼堂と隔てるために、ジクという川に見立てた溝がその周囲を取り巻いている。

・〈牛と灯心〉旧暦2月12日（今は新暦の3月12日）は、夜半に二月堂下の若狭井から聖水を汲むもとも重要な儀式の日。その準備の一環として、内陣は綺麗に掃き清められ、本尊を祀る須弥壇上を一周するかたちで、牛の小像の両角が、予め用意して長く繋いであった灯心で結ばれる。

◎ソグド人墓葬棺床屏風

・MIHO美術館が所蔵する棺床屏風は中国北部の墓から出土し、今は失われているが、長方形の棺台の上に立てられていた。時代は北朝の6世紀。

・何らかの公的立場にあった有力なソグド人を祀ったものらしく、ゾロアスター教徒であったことがわかる。

・ここには、次のような浮彫が施されている。

・葬儀場面：ゾロアスター教の祭司が火を汚さないように口に覆いをかけ、拜火壇の前に立っている。拜火壇は持ち運び可能な小型の香炉状のもの。

・祭司の下には、ゾロアスター教の葬儀で重要な役を果たすという一匹の犬が描かれている。犬が凝視することによって、穢れた魂が追い払われるのだという。

・天上昇と地上昇：四臂の女神が2本の腕の上に挙げて日月を持ち、あと2本の腕はライオンの頭飾りのうえに置いている。女神はクシャーン朝の貨幣に見られるナナ（ナナイア）で、アナヒータ女神と同一視される。女神ナナが両腕で日月を捧げ持っているという構図は二月堂本尊観音菩薩の光背の裏面に見出すことができる。

3. 大乘仏教の生成

◎大乘仏教の生成についてはさまざまなゾロアスター教影響説がある。だが何をもちて影響があったとするのか、果たして根本的な史料に基づいているのか、心もとない限りである。これには前提として、初期仏教がのちに大乘仏教と呼ばれるような思想になぜ変質しなければならなかったかをあらかじめ確認しておく必要がある。

◎ブッダ没後、数百年もすると、インドは周辺の異民族が次々と侵入する動亂の時代に入りそれが数世紀にわたって続いた。西北インドを中心とする一帯は、略奪・強盗・殺人が日常茶飯事となり、人々は塗炭の苦しみを味わった。苦しみからの救いを求めて、人々はただひたすら仏塔の周りを廻り、ブッダの再来を願った。このような民衆の願いに応えようと、主として在家の仏教者のなかから、みずからの解脱よりも他者の救済をめざす「菩薩」と呼ばれる人々が登場し、現実の苦しみからの救いを説いた。この過程において、歴史上のゴータマブッダは時空を超え、あたかも救世主であるかのように、過去や未来に存在する仏陀、永遠に存在する仏陀、十方のあらゆる世界にも存在する仏陀など、数限りない新たな仏陀に生まれ変わった。初期仏教徒たちがシャカムニの没後、無仏であることに堪えていたのとは大いに異なる。無仏から多仏への変換は仏教思想の根本的な変質を意味する。救済の方法論をめぐってさまざまな思想が現れたが、ゾロアスター教などの影響もこのような大乘仏教生成の文脈のなかで考えざるべきであらう。